日本での交換留学

復旦大学
k2590016
チョウキ

時間が過ぎるのは本当に早いもので、日本での交換留学生活も、いよいよ終わりを迎えようとしています。一学期という短い期間でしたが、とても充実していて、意義のある日々でした。

思い返せば、今から四年前の 2021 年、私はお茶の水女子大学の交換留学に応募し、すでに寮の申請まで進んでいました。しかし、新型コロナウイルスの影響で、日本に来ることができず、対面での留学は断念せざるを得ませんでした。それから四年後、再びこのプログラムに応募し、ついに茶大での留学の夢を実現することができました。しかし、四年間の空白があったため、日本語の力がかなり鈍ってしまい、四月に来日した当初は、日本人とうまくコミュニケーションが取れるか不安でいっぱいでした。そんな私を温かく迎えてくださったのが、茶大の先生方と音羽館のかんり管理人さんでした。中家先生、赤木先生、桜井先生、市原先生の日本語授業では、会話の練習を通して日本語への自信を少しずつ取り戻すことができました。また、指導教員の富嘉吟先生には、学業面でも日常生活でも大変お世話になり、研究に関する貴重な書籍も快く貸してくださいました。この場を借りて、深く感謝申し上げます。

近年、中国の若者の中では、さまざまな理由から日本への関心が高まっています。私自身も、中国にいたころから本や SNS を通じて日本について学んできましたが、やはり自分で実際に体験し、観察してみることで、より深く理解できたと思います。この学期、私はよくスーパーで食材を買って自炊していたので、ここ数年の日本のインフレ、特にお米の値上がりを肌で感じることができました。また、東京近郊だけでなく、日光、関西、北海道などにも旅に出かけ、多くの博物館や展覧会を見学し、神社の祭りも見ることができました。日本の風土や人々の暮らし、都市部と農村の違いなどについても、少しずつ理解を深めることができました。これらは、日本で暮らしたからこそ得られた、かけがえのない経験です。

ここ数年、世界の政治情勢は大きく変わり、どの国も無関係ではいられない

状況です。それでも私たちは、どんな国であっても、よりよい社会になることを願ってやみません。

五月の末、関西で開かれていた「三大国宝展」を見に行った際、京都国立博物館でとても感動する言葉に出会いました。最後に、その言葉を皆様にご紹介して、私のスピーチを終わりたいと思います。

美術はたしかに文化の壁をこえていきます。政治状況にかかわらず、時を越え、言葉を越えて、人々の心に触れることがあります。しかし、それは、異文化を受けとめる度量や受け入れる姿勢、私たち自身の異文化と出会う力にかかっているのかもしれません。